

オーズトラリアの 偉人たち

ティモシー・ストレイチャー



オーストラリアの偉人たち

ティモシー・ストレイチャー 作

初版 1954 年

新版への覚え書き

1897 年のオーストラリア大陸発見は、1888 ～ 94 年の《復古戦争》の続きとも言えた。1904 ～ 07 年の調査隊と、1907 ～ 28 年の入植者たちは、奥地に巢食う旧支配者の存在を知らなかった。しかし 1930 年からは深刻な事態となり、そこから 2 年が、この大陸の歴史上で最も血生臭い年間となった。

そして 1954 年、ティモシー・ストレイチャーが『オーストラリアの偉人たち』を著した。時代背景、入植の成功、そして旧支配者どもを打倒して全人類を救った偉人たちの記録である。後世になって、この書は当時のドキュメントとして、もっとも重要な一冊であることが判明したのである。

——マーティン・ウォレス（編者）

デイヴィス探検隊長 (1892～1931)

アラン・デイヴィスは、父サミュエルと母ブロンウィンの一粒種として、ウェールズのポンティプリッドで生をうけた。父母は《復古戦争》の際に王党派の捕虜となり、ゾンビへと変質させられた（旧支配者は下僕とする対象にほぼ永遠の生命を約束する）。戦後にアランは、後にオーストラリア大陸を発見する探検隊のカーナヴォン卿の養子となった。彼が養父から学んだ技術は、広大なオーストラリア奥地の探索の際に役立った。アランの最期の功績は、最凶の旧支配者たるクトゥルフ自身の位置をみなに知らせたことにある。その後で行方不明となったが、戦死したとみられている。



アランツァ・カストロ (1904～1932)

旧支配者の打倒より数年、カリブ海の島々は、無作為に襲撃を繰り返す恐るべき怪物どもに悩まされていた。この事態に対処すべく即応部隊が結成され、以来島々は平和裏に守られてきた。アランツァは、家族が怪物どもに殲滅された16歳、この部隊に入隊し、すぐさま頑健な戦士として名を挙げた。たとえどんなバケモノと対峙したとしても、決して後退しない。その粘り強さと戦闘技術は、オーストラリアへの入植者を支援するのに最適と判断され、現地軍に徴用された。三体のショゴスに蹂躪されたウェンパウェンバの戦いにおける徹底抗戦で、英霊として殿堂入りした。



アレクサンデル・プルースト (1887～)

《復古戦争》の直前、パリで生まれた。1893年、戦火が頂点に達すると、両親とともにベルサイユの親戚の下に身を寄せた。そこでアレクサンデルは、ルノーの工場で学徒として働いた。機械に対する適性のおかげで、ルノーの車輛（特に戦闘車輛）に対して数多くの創意工夫と改良で貢献し、かけがえのない人材となった。オーストラリアに出向となると、旧支配者に対抗できるよう、戦闘車輛をより効果的に改良した。1933年にはフランスに戻り、1952年の退職時にはルノーの技術主任となっていた。





ビリー・ニーボン

(生年不詳～)

最初にオーストラリア海岸に到達した西洋人は、クオリと呼ばれる先住民の歓待を受けた。クオリは我々を「彼方よりの人」と呼び、既に我々の存在を知っていた。聞くところによると、どうやら何年も前に、オランダ船がオーストラリアで難破したらしい。生存者はクオリに協力し、旧支配者に対抗して英雄となった。彼らの物語は何世代にも渡って語り継がれた。

ビリー・ニーボン（クオリ語からの翻訳）は、先

祖代々の土地を闊歩する旧支配者に対抗するための同盟者として、西洋人を歓迎したひとりであった。案内人として、我らの軍隊を奥地のより深い部分まで連れていってくれた。1948年には、バラマタの市長に選出された。

砲撃手ミリガン(1902～)

1885年、ハリー・ミリガンの両親は、アイルランドからインドへと移住した。そこで父はマラサン第二砲兵師団の軍曹となった。その後ハリーも同じ道を歩み、1930年、探検隊の砲兵部隊の砲手に任命された。大戦が終結するとインドに戻り、今はデリー・ジャズ・バンドでトランペット奏者をしている。





ボリス・クルップ (1879～1950)

1879 年、ドイツのエッセンで生まれた。自分の名字と同じ名前のエッセンの鋼鉄会社に入社したが、親族関係は全くなかった。それでも社内で立ち回るには有利だっただろう。クルップ一族は悪名高き王党派であり、その多くは戦後、処刑もしくは終身刑となった。ボリスとはといえば、列車用を含む車輛の装甲板の開発で、多くの経験があった。オーストラリア探検隊に徴用されたのも、その技術を民間用車輛と軍用列車のメンテナンスに活用するためだった。1935 年、健康問題で退職した。

フランダース船長 (1855～1932)

ジェームズ・フランダースは、14 歳になるまでに世界を 3 周していた。父親はイギリスと日本を行き来する商船の船長だった。ジェームズ自身は復古派の日本海軍に参加して旧支配者と対抗し、一等航海士にまで昇進した。終戦後は商業に復帰し、船主かつ船長となった。オーストラリアへの入植時には、暴風や超自然的な脅威をもとめせず、重要な軍事物資を運びこんだ。1932 年、ジェームズの船はオーストラリア南岸で難破し、生存者は一人もいなかった。



フリー大佐 (1902～)

ザイナ・フリーはバイルートで生まれた。旧支配者に忠誠を誓う王党派に家族を惨殺されると、世界の戦火に身を投じ、悪名高きローレンス政権に対抗するレジスタンスに加わった。エルサレム包囲戦では敗北したが、当時すでに傑出した司令官とみなされていた。オーストラリア先発隊の直衛部隊の指揮を任されたのも当然の流れであった。パラマタの戦いで重傷を負い、レバノンに帰還した。以来引きこもりがちになり、幼馴染のマジア・ハダードと一緒に地中海の海岸地方で暮らしている。



ジョーンズ伍長 (1869～1950)

ジョン“ジャック”ジョーンズはウォルミントンオンシーで生まれた。父親は肉屋で、15歳になったジョンは海へと逃亡した。《復古戦争》ではムハンマド・アフマドの部隊に入り、カイロの戦いで負傷した。オーストラリア入植の志願者が募集されたとき、高齢にも関わらず真っ先に登録したひとりとなった。北アフリカでの苦い経験から得られた旧支配者に対する知識は極めて重宝され、特に引き際を察知するのに長けていた。

ジャーゴ伯爵 (1641～)

ステファンは、トランシルヴァニアの悪名高きジャーゴ家に生を受けた。叔父ジョセフは、地元の旧支配者の代官として残酷かつ異様な罰によって恐怖政治を敷いていた。ステファンは若くして錬金術と「魔法」において才能を示し、ヨグ＝ソトース教団に入信した。叔父が不可解な事故で亡くなると、後を継いでトランシルヴァニアを治めた。その忠実なる奉仕に対して、旧支配者はジャーゴに不死を賜った。ところが《復古戦争》の際、ジャーゴは人類側に寝返り、トランシルヴァニアの恐るべき支配者どもを追い払う戦いで、多大なる功績を上げた。

旧支配者の行動に対する詳細な知識は、遭遇時に狂気を回避するのに役立った。オーストラリア探検隊に加わると、敵の真意を見抜くその力で、数々の戦いを勝利に導き、自らの価値を証明した。戦後はトランシルヴァニア城に隠遁し、旧支配者に関する文献の研究に戻った。



ダグマー・クラウス (1881～)

オーストリアはリンツの裕福な農家で生まれ、ウィーン大学で農業を学んだ。《復古戦争》でオーストリアの農地の多くが荒廃したため、戦後何年もかけて一族の土地を回復させることに心血を注いだ。その後オーストラリア探検隊に志願し、あらゆる種類の農場を設立してきた自身の経験と技術を、この新大陸へもたらした。そのまま現在もオーストラリアに住み続け、農業技術の改良に日々邁進している。

デスタ・デンジャー(生年不詳～)

若い頃の記録はなきに等しい。もちろん、これは本名ではない。一説によれば《復古戦争》後に選出されたジンバブエの初代大統領シメオン・クマロの孫娘だという。1915年、クマロの一族は王党派のゲリラに虐殺されたが、生き残りがいたらしい。それから数年、王党派の暗殺者から身を隠しながら、デスタは数多くの技能を身につけ、恐るべき戦士となった。1927年にキッチナーによって見いだされ、1930年にはオーストラリアに向かった。



最も有名な功績は、旧支配者との戦いのさなか、単独でオルコス神殿を破壊したことである。これによって辺りの入植者たちは、次元扉から出現するバケモノどもについて恐れる必要がなくなった。終戦後もオーストラリアに留まり、何度も内陸部に赴いて調査活動が続けている。



ドナルド・マクドナルド

(1879～1949)

マクドナルド一族のドナルドは、生涯にわたって博愛主義を貫いた。財産のほとんどを慈善活動のために寄付したのだ。オーストラリア探検隊に対しても常に協力的で、資金と資源の両方を寄贈した。そんなふうにして莫大な財産を散逸させた後の1939年、弟のファーストフード関連事業に参加するため、北米に移らざるをえなくなった。1949年、突然の心不全で亡くなった。



フェルディ・カッサン(1882～)

フェルディナント・カッサンは、オーストリアのウィーンで生まれた。父親は農業に通じており、種苗の目録作成で有名だった。フェルディは、その父の後を継いだ。その幅広い植物や穀物に対する知識のおかげで、オーストラリアでよりよく育つ穀物を見つけるにあたり、欠かせざる人物となった。すぐに小麦にはあまり適していない土壌であることに気づき、主食としてトウモロコシを作付けすることを提案した。またオーストラリア土着の植物の研究にも力を注ぎ、現在では重要な食糧源となっている幾つもの新種を特定した。

フランツ・ノイマン(1811～)

バイエルン州ミュンヘンの生まれで、ハイデルベルク大学で医学を学んだ。その頃はヨグ＝ソトース教団に傾倒していたと見られている。旧支配者からの信頼を得て、死者を蘇らせ、寿命を伸ばす秘術を授かった。《復古戦争》では体制維持派として戦ったが、ベルリンの戦いで捕虜となった。1927年、「医師兼旧支配者の専門家として、オーストラリア探検隊に参加する」という条件のもと、監獄から釈放された。軍で何百、何千もの命を救ったことで、昔の罪は許された。その後ベアーバーラムに移住し、今でも医者として活躍している。





高梨将軍 (1888～1932)

高梨明（たかなしあきら）は広島県生まれ。父親は《復古戦争》で王党派として戦い、敗戦後に切腹した。明は、家名を挽回すべく、16歳で日本陸軍に入隊した。その勤勉さ、決断力、天性の才能によって、1929年には最年少の現職将校となった。そしてオーストラリア探検隊へと派遣され、連合軍の指揮をまかされた。最前線での指揮を好むため、ワガワガの戦いで歩兵部隊と共に突撃し、部隊は壊滅して、本人も還らぬ人となった。

ハリー・ボーンズ (1880～1948)

ウェールズのポンティプリッド生まれ。《復古戦争》の後、地元の炭鉱で働きながら、夜学で数学と工学をマスターした。これらの資格によってキャリアアップし、鉱山技師長にまで上り詰めた。1915年、王党派が勢力を伸ばしていたトニーパディで、武装蜂起したと王党派と政府側の激しい武力衝突に巻きこまれた。その際、兄のダイは、王党派の指導者ウィンストン・チャーチルの殺害に成功した。



キッチナーは、オーストラリアの天然資源をより活用できるようにしたいと目論み、入植者に採掘技術を教えさせるために、ハリーを探検隊に招聘した。1942年、南ウェールズの谷間に戻り、1948年にベッドの上で生涯を終えた。



イワン・カルポフ (1888～1932)

シュリーフェン伯爵の王党軍を相手に、維新派が2年以上徹底抗戦を続けたサンクトペテルブルク包囲戦の最中、イワンは生を受けた。戦後は陸軍に入隊し、地雷の設計開発の専門家となった。その技術はオーストラリア探検の際に高く評価された。イワンが敷設したワラルーの地雷原は、1931年、侵入してきた旧支配者を撃退するのに大いに役立った。ただしイワン自身は、不運にも旧支配者の最後の敗北を見届けることができず、地雷保管庫の爆発事故で命を落とした。



ジェニー・アップルシード (1898～)

1886 年、ジェニーの両親はモンタナ州へと移住した。《復古戦争》の際、地方農場の多くはショゴスによって荒廃させられた。何年もの実験の結果、ジェニーの両親は最終的に荒廃地を元の農場へと回復させることに成功した。その後ジェニーは両親と同じ道を歩んで農家となり、荒廃復興に関する専門家となった。オーストラリア探検隊にスカウトされたのは、その類いまれなる知識を入植者と分け合うためである。ジェニーはその後オーストラリア大陸に発ち、バララット付近で家族農場を設立。今でも家族とともにそこに住んでいる。

ジュリエット・ヴェルヌ (1903～)

フランスのナントで、ミシェル＆ヴァレリー・ヴェルヌ夫妻の娘として生まれた。父ミシェルは飛行船技術の先駆者だったが、《復古戦争》で飛行船を操縦中、“闇の紡ぎ手”と呼ばれる旧支配者との戦いで命を落とした。ジュリエットにとってその影響は大きく、けっきょく女性初の飛行船パイロットとなった。オーストラリア内陸部の偵察中には、何度も死ぬような目に遭った。旧支配者の神殿を破壊しようとして墜落し、奥地を 1,300 キロも歩き回る羽目に陥った。ジュリエットの祖父は弁護士であったが、アマチュア作家としても知られており、旧支配者に支配されなかった並行世界の歴史を面白おかしく書きつづった。ところが、この類いの文学は流行ることはなかった。



カペナ・アリカ (1896～) サモア人

太平洋諸島は、旧支配者統治の文明社会の辺境にあった。それより南下することは人類には許されていなかったため、オーストラリアの存在はずっと隠されたままだった。カペナの先祖の多くは、太平洋を統治する旧支配者に仕えていた。《復古戦争》では、カペナの祖父は王党派として戦っていたが、モロー博士のミュタント部隊による乱暴狼藉を目にし、寄って立つ陣営を変えたことで島民も旧支配者に反旗を翻し、維新派に加わった。カペナは既にオーストラリア入植地のことを聞き及んでいたため、主要部隊とは別に単独で上陸し、農地への襲撃に対応するために結成された即応部隊の指揮官として能力を発揮した。そしてその戦争を生き延び、オーストラリアの海岸に定住して漁師となった。



キッチナー (1855～1940)

アルジャーノン・キッチナーは、《復古戦争》の〈セットフォードの大虐殺〉で悪名を高めたホレイショ・キッチナーの弟である。兄とは異なり、アルジー（親しい友人はそう呼んだ）は維新派として戦った。勧誘に優れ、何百人もの志願兵と共に旧支配者と戦った。オーストラリア探検隊結成の際には、英国政府から信頼され、編成を任された。そこで才能のある人材を求めて世界中を回った。戦後は自宅へと戻った。ホレイショのほうは、オーストラリアでも旧支配者側として参戦し、ワガワガの戦いで命を落とした。



レディ・カーター (1890～)

エリザベス・カーターは、カーター家の最後のひとりである。未婚のうちに、栄誉ある家督を継いだ。母方の祖父ヒラリー・カーターは、エジプトのピラミッド破壊任務の指揮官であった。ギザのピラミッドで旧支配者の力の源泉を取り除いたものの、そこで英雄的な死を遂げたことは広く知られている。カーター家の領地には、多くの炭鉱があった。エリザベスはオーストラリア探検隊に何千トンもの石炭を寄付し、現地で採掘できるようになるまで、それが機関車の動力源となった。



奥地遊撃隊

奥地遊撃隊（より正確には長距離奥地挺身隊）は、シルヴァー少佐の発案によるものだった。改造車やトラックを駆り、入植地より遠く離れた旧支配者を見つけ出しては、一撃離脱戦法を繰り返した。この部隊に志願するのは、クオリの民が多かった。その奥地に対する知識は、未踏の地を進む上で必要不可欠だった。



ブラックストック卿 (1865～1942)

ブラックストック卿の父親は、1854年、コーンウォールの地所からアフリカ南部へと移住した。生産性の高い金山を数多く開発し、大陸で最も裕福な市民のひとりとなった。しかし反乱の嫌疑をかけられ、旧支配者によって処刑されたため、現ブラックストック卿が家督と同時に莫大な富を相続した。父親を殺された恨みを背景に、旧支配者に立ち向かう維新派のグループには、惜しみなく資金提供した。オーストラリアの開拓にも、かなりの貢献があった。



シン中尉 (1899～1932)

パンジャブのシク教徒は、長らく旧支配者の統治に抵抗してきたという、輝かしき歴史を誇っている。ジャワン・シンもまた、生まれたときから偉大なる戦士となるべく研鑽を重ね、最期の瞬間まで旧支配者と戦い続けることを誓う集団の一員だった。終戦後もインド亜大陸の一部には、旧支配者に忠誠を誓う派閥が数多く残っていた。若き頃のジャワンは、そういう連中との軍隊戦に明け暮れた。やがてオーストラリアへ派遣される防衛軍への参加を志願し、機動戦での適性が認められて、軽装甲師団に配属されたがワガワガの戦いで多くの仲間と共に命を落とした。



“マッド”ジョンソン(1864～)

ウィリアム “マッド” ジョンソンは、史上最も偉大なハンターのひとりとして知られている。南米では（かつては旧支配者のペットだった）巨大ジャガーの最後の一匹を仕留めるべく、3年に渡って追跡し続けたことで、“マッド”という新たな称号を得た。1915年、オーストラリアに渡るとすぐに奥地を目指した。持ち前の鋼鉄の神経と、幸運の連鎖により、ゾンビ、ミ=ゴ、さらにはショゴスまで、確率の法則を無視した驚嘆すべき数だけ仕留めた。現在は、英国のバシルドン近郊で静かに暮らしている。



ミスター・メリノ(1871～1931)

メリノ族の家系はスペインにまで遡り、長いあいだメリノ種の羊を育ててきた。なかでもベンジャミン・メリノは、オーストラリアの最初の入植者のひとりである。内陸部での羊の飼育に尽力し、食肉と羊毛の両方を確保した。ところが1931年10月、メリノの農場で何かが起こった。かつて家があった場所には大穴だけが残った。周囲の牧草地に、何千頭もの羊の死骸が散らばっている写真は、旧支配者の破壊力の凄まじさを物語っている。いまだに何が起こったのか、正確にはわかっていない。

ミセス・ブラッドショー(1870～1948)

ジェミマ・ブラッドショーは、1870年、リーズ の労働者階級として生を受けた。優秀な学生だったジェミマは、奨学金を獲得し、ケンブリッジ大学で数学を学んだ。卒業後はロンドン・ノース・イースタン鉄道に就職し、時刻表の専門家として活躍した。複雑な鉄道網を効率的に管理する能力があったため、オーストラリアの新たな鉄道を管理するのには最適な人選であった。





メリンダ・スイート(生年不詳～)

オーストラリアから旧支配者が敗退したことにより、クオリその他の先住民について、多くのことが知られるようになった。かつては狩猟採集生活を送っていたようだが、到来した旧支配者によって、その伝統的な生活様式が阻害された。一部は生き延びるために汚染地域を離れて、定住型の農耕を始めた。最初のオーストラリア入植者は、小麦の栽培を試みたが、この土地には不適合だった。メリンダ・スイート(と入植者に呼ばれていたこの女性)などクオリの農民は、入植者たちに土壌およびそこに最適な作物について懇切丁寧に教えた。そしてすぐにトウモロコシが最適だと判明し、それは東海岸じゅうに広がった。

ルイージ・カプロッティ(1876～)

イタリアのトリノ生まれ。14歳の時、機関車メーカーのアンサルドで見習いとして働き始め、実家を離れてジェノバに移住した。やがて家族と共に最初のオーストラリア入植民となり、機関車整備の仕事に就いた。旧支配者との戦いでは、長年の機関車整備の経験を、装甲車、飛行船、野砲の修理に役立てた。ルイージとその技術チームは、旧支配者に対抗する武装を維持するため、寝る間も惜しんで働いた。すなわちオーストラリア戦争では、名の知られぬ英雄のひとりだったのだ。この戦争を生き抜いたルイージは、現在トゥーンバの町で穏やかに暮らしている。



ギヨンヌ教授 (1880～)

ジュネーヴには時計産業の伝統があり、フェリックス・ギヨンヌもまた、時計職人の家系に生まれていた。やがて時間の性質を理解するにあたって、哲学的かつ科学的にアプローチをするようになった。1920年、時間の性質および旧支配者の時間をずらしたり歪めたりする技術に関する第一人者として、ジュネーヴ大学の教授に選任された。この知識によって、フェリックスはオーストラリア探検隊の主要メンバーとして抜擢された。現在でも解明されているとは言い難い技術を駆使して、時間を操作し、部隊を「より速く」移動させることで、旧支配者の進軍に合わせて撃破することができるのだ。



“テックス”マグワイア (1889～)

テッド“テックス”マグワイアはアイルランド系だが、生まれはメキシコ領テキサス州だ。叔父からロングホーン種の牛牧場を相続したが、実際テキサスで最も大きい牧場のひとつであった。困難な環境下でロングホーンを飼育した知識と経験は、オーストラリア探検隊の家畜コンサルタントとしてぴったりだった。テックスは自分の牛をこの新大陸に運んだのみならず、他の農家にも助言をし、家畜の品種改良のための飼育プログラムを実施した。戦後は、テキサスの牧場へと戻った。



ティモシー・ブラッシー (1882～)

英国の鉄道網創設に尽力したトーマス・ブラッシーの孫。祖父の輝かしき足跡をたどり、鉄道技師およびプロジェクトマネジャーとして名を上げ、オーストラリアの鉄道開発にも大きく貢献した。しかしそこで、奥地の極端な温度など、多くの新しい課題に直面した。これは熱膨張を考えた上で、レールの敷設を工夫しなければならないことを意味していた。ときおり線路上にはミ=ゴの死骸が横たわっており、列車防護用として彼は機関車の先端にとりつけるカウキャッチャーという装備を開発した。





イヴェット・キーラ (1891～)

キーラの一族は 1795 年、フリノワール＝グラン（エヌ県）に鑄鉄所を設立した。19 世紀末までに、キーラの工房はヨーロッパ最大の鉄鋼生産者となった。イヴェットは、当時の家長アーネスト・キーラの長女で、オーストラリア内陸部に進出するために必要不可欠な線路敷設のために、鉄のレールの大規模出荷の手配を一手に引き受けた。

チュ・シアン

朱 湘 (1902～)

北京生まれ。《復古戦争》後、両親はパリの中国文化庁に配属された。湘は高等師範学校で工学を修めた。そこでジュリエット・ヴェルヌと親しくなり、以来、飛行船の設計に夢中になった。ヴェルヌが任務のためにオーストラリアへ渡ると、湘もまた担当技師として同行した。そこで湘は、探検隊の飛行船を、より頑丈かつ新大陸のさまざまな状況に対応できるよう改良した。戦後は中国に戻り、現在は飛行船研究プログラムを主導している。



オーストラリア ～大いなる南の大陸～

作：マーティン・ウォレス

画：ジェームズ・コルマー

出版：SchilMil Games

発売元：

- Stronghold Games (アメリカ)
- Ludofy (ブラジル)
- Giochix (イタリア)
- MasQueOca (スペイン)
- Nuts Publishing (フランス)
- Phalanx (ポーランド)
- Schwerkraft-Verlag (ドイツ)
- Arclight Games (日本)



©2018 SchilMil Games, Auckland, New Zealand